

イワクラに関する秦氏視点からの考察

理事 前田 豊

イワクラ学会が2004年春に設立されて約5年が経つ。イワクラの起源とその意義、役割については種々語られており、そろそろイワクラ学の構築が必要との意見もある。筆者は学会設立の発起人の一人となつた経緯があるが、まだ、確たる理論体系をもっているわけではない。ただ自分が現在住んでいるところが、神奈川県秦野市であることも関連して、秦氏とイワクラの関係について関心を持つてきた。というのも、どうやら、秦氏の文化の特徴として、石の文化を挙げることができるようなのである。そこで、秦氏とイワクラに関連して、最近入手した次の3つの説を取り上げて考察してみたい。

1) 吉備のハタ氏の磐座に関する佐藤光範氏の研究結果、
2) 久慈力氏の巨石文化ミステリーの新説、
3) イワクラ信仰に関する徐福と秦氏の役割(本論者説)

1. 吉備のハタ氏の磐座に関する佐藤光範氏の研究結果

奇しくも、2009年1月31、2月1日にかけて、イワクラ学会は、イワクラツアー in 岡山を開催したが、そのテーマは、「ハタ氏の磐座」を掲げ、吉備の磐座を探索するものであった。

これらの日々、主催者代表の佐藤光範氏は、熱意をこめて、吉備の秦地区を含む各種の磐座を紹介してくださり、大変勉強になった。その詳細については、ご当地の方の紹介にお任せするが、若干要点に触れておきたい。即ち、案内された秦(ハタ)氏の磐座の多くは、稻荷神社のご神体となっており、信仰の対象であるということである。

もつとも中心的な磐座は、正木山頂上の「麻佐岐神社」に鎮座するご神体石の磐座であろう。作山古墳や造山古墳が、この神社を遥拝

するように配置されていることから、古墳時代にはすでに信仰の対象となっていたことが考えられる。因みにこの神社のご祭神は「大國魂神」という。



写真1 吉備の麻佐岐神社のご神体磐座

佐藤氏は、秦氏と磐座と銅生産と地名を関連付けた研究をライフワークとされており、正木山山系に銅鉱採掘の跡があるとして、磐座は、銅精錬技術をもった弥生時代

にさかのぼる秦氏の信仰の対象であつたのではないかと考えておられる。



写真2 麻佐岐神社拝殿

吉備の巨大古墳を造り、ヤマト国家の形成に大役を演じた吉備族は秦氏であつて、磐座を拝む神道を形成してきたというわけである。

尚、秦(ハタ)氏については、日本書紀に、応神天皇の御代に初めて、秦始皇帝の子孫・弓月君一行が朝鮮

半島から渡来し、仁徳天皇の時、波陀の姓を賜つたとの記述があることから、かれらが秦氏の祖であるとの一般認識が形成されているようである。しかし、佐藤氏はこれに対して異議を唱えておられる。つまり、吉備の秦原廃寺が、塔の礎石を伊予部山の磐座の真北に置き、弥生時代からの信仰が継続していることは、弥生時代からハタ氏が日本列島に居た証拠であるというわけである。まさに、弥生時代の楯築墳丘墓は、ハタ氏のお墓で、日畑の人が守っているのである。

2. 久慈力氏の「巨石文化ミステリー」に関する新説

久慈力氏の近著「日本古代史ミステリー」(株学習研究社、2008年12月発行)の第48章「巨石文化ミステリー」には、非常に参考になる情報が散りばめられている。その説

の一端を紹介してみると、渡来人の文化、特に蘇我氏、秦氏の文化の特徴として、石の文化を挙げることができるということである。その例として、飛鳥地方の「酒船石遺跡」や「亀形石造物」などは、ペルシヤ系渡来人のゾロアスター教の祭祀施設と見ていることが挙げられる。また、飛鳥の酒船石丘陵は、人造の丘であり、ハオマ酒(アフラ・マズダの述べるハオマ草や山羊の乳を溝に流して調合する酒)を作る施設、聖水を作る施設、神々に祈りを捧げる場所をもつ「人工のピラミッド・聖塔ジツクラトウ」であつたという。

一方、北九州豊前の宇佐地方は、秦氏の居住地で、秦王国と呼ばれたという説がある。豊前市にある求菩提山には、イスラエル系秦氏の山岳信仰や巨石信仰が顕著に現れているらしい。この山には天狗伝説があり、鬼神社には八天狗像があり、日本に上陸した古代イスラエル八支族を表しているという。天狗た

ちは修験者がつける兜巾を付けているが、これはイスラエル人が儀式のときに頭につけるヒラクテイリーに酷似しているという。求菩提山の山頂には、多くの磐座があり、イスラエル系の石工の手が加わつたと見られるものもあり、モーセの十戒の舞台となつたシナイ山に見立てて造られたものと考えられている。

その他、日本各地に見られる山頂の磐座は、イスラエル系の渡来人である秦氏が、彼らの母国の聖なる山を入植地に再現しようとしたものと考えられている。その最たる例は、信濃の諏訪神社前宮のご神体となつている守屋山であろう。守屋山はアブラハムがイサクを神ヤーヴに捧げるために登つた山(モリヤの山=エルサレム)と同じ発音を持つており、山頂に祭壇状のイワクラを有している。その他例えば、青森県の戸来村周辺の十和利山、十和田山、戸来岳、大石神巨石群、十三湊周辺のモヤ山などの巨石信仰、ピラミ

ツド信仰などがある。岩手県の七時雨山、姫神山、早池峰山、五葉山にも頂上に磐座が形成されており、頂上を人工的に加工したピラミッドであると考えられている。奈良県橿原市の香具山、畝傍山、耳成山、三輪山も多くの磐座を形成するピラミッドの山と考えられる。

久慈氏の巨石文化に対する考え方は、次のようなものである。即ち、メンヒル(立石)、ドルメン(テーブル形石)、ストーンサークル(環状列石)、ストーンヘンジ(環状建造物)などは、世界各地にみられ、その建設目的は、天体観測所、墳墓、宮殿、祭場、集会場などを挙げる事ができる。その起源は、地理的にはシルクロードからメソポタミアまでに亘り、年代的には、紀元前十数世紀まで遡る。これらの巨石信仰や石造技術をもっていた人々は、古代のシュメール人やエジプト人、イスラエル人などで、彼らは、エジプトの

ント船やシュメールのシュメール船、イスラエルのタルシシ船などによって、ペルシャや西域の陸のシルクロードを経由して、巨石や聖石信仰と石造技術を地中海沿岸やアジア、中国、朝鮮、日本に持ち込んだものと考えている。

巨石信仰は、イスラエル民族(秦氏)だけのものではないが、特にこの民族にはその傾向が強い。石の加工技術も優れ、都市、土木施設の建設、宮殿、神殿の建設、柱や像の建築に優れた技を示した。それはエジプトでの奴隷時代に培われたものと考えられている。飛鳥地方に渡来していたペルシャ人の石加工技術に古代イスラエル人のそれが濃厚な影響を与えたことは十分考えられるという。

3. イワクラ信仰に関する徐福と秦氏の役割(本論者説)

筆者は、愛知県の東三河地方に13年間居住する機会を持ったが、そのとき、当地に石巻山、本宮山、鳳来寺山という3神山があり、それぞれの山頂付近には巨大な磐座と天狗や鬼伝説があることを見出していった。この中、石巻山については、秋田県の大湯にあるピラミッド型の黒又山(クロマンタ)と同じく、周囲から遥拝の対象となった古代ピラミッド山であることを論証し、イワクラ学会論文集「イワクラ」(2005年6月、遊糸社発行)に掲載されている。そして、この地域には、秦始皇帝の時代に不老不死の霊薬をもつて、童男童女を含む技術者集団が大量に渡ったという徐福伝承をもつ秦氏の末裔の存在が確認された。これらのことは、拙著「古代神都東三河」(1996年4



写真3 東三河の石巻山(ピラミッド)



写真4 東三河照山頂上にあった神体石

月彩流社発行)に記載されている。その後、神奈川県秦野市に住む機会を得たが、この地域にも相州大



写真5 相州大山は蓬萊山

山を含む「蓬萊山」呼ばれた丹沢山系と徐福伝承をもつ秦氏の存在が確認された。しかも、大山や丹沢山系には、石尊神や、クルソソン仏という石神信仰が存在していた。また、大山山頂には、4千年前の祭祀

遺跡が存在したことが、考古学者の発掘により判明している。大山中腹には、阿夫利神社から出土した古



写真6 大山中腹の目形石(古代文字刻印)

拙シメール文字が記されたのではないかと言われる目型石が存在する。ペトログラフィ岩ともよばれ、記された文字の中で、 Ψ 型の文字はゾロアスター教の聖なる動物である牡牛(ミトラ神)を表していると見ら

れている。目形石にはその他、歴史言語学者の川崎真治氏の解説によつて、古代中国甲骨文字(父)やインドのアシヨカ王に關係するアヒルクサ文字、エジプトの象形文字(ラ…日神)が混在していることが判明している。これは、現代風に表現すれば4カ国語の文字が記録されているのである(鈴木旭著「超古代文明の秘密」(1994年8月、(株)日本文芸社発行)。即ち、シメール系海人族が、地中海や中近東の周辺文化を携えて渡来して残した遺跡と考えられるのである。

一方、徐福一行は紀元前3世紀(BC219—210)に、シメール系海人族の情報を得て、秦始皇帝に不老不死の靈薬がある、日本列島の渡航を申し立てたのであろう。始皇帝と徐福の祖先は系図的に同一であったとも言われている。そもそも、中国の西域に位置する秦帝国は、漢民族の最初の統一王朝と

考えられているが、実際には、紀元前3世紀にアレキサンダー大王の東征によつて敗れた、アケメネス朝ペルシャのバクトリア(大秦国)からの亡命勢力が建国したものとされる(鹿島昇説)。バクトリア勢力は、シルクロードの要衝を支配し、経済力、政治力、軍事力も保持していたので、ペルシャから独立して、秦帝国を建国することができたのである。始皇帝はギリシャ系イスラエル人の呂不韋の子であるとも言われている。そして、徐福一行は、始皇帝の独裁政治に嫌気をさした秦帝国の有力者・古代イスラエル系秦氏を大量に含む人々の植民活動であったと推定される。

かれらは、青銅の銅鐸や鉄製の農具や武器、金銀財宝、穀物の種子を積み、船団を組んで出港した。乗員の中には、採鉱、鍛冶、織物、土木、酒造、建築、造船、などの技術者や医者、楽人や水夫、農夫もいた。その指導者が方士徐福である。

彼らを支援したのは、秦帝国を支えた呂不韋などの秦氏（イスラエル財閥）であろう（久慈説）。

「漢書」には、「徐福は平原広沢を得て、王として止まり来たらず」と記しており、日本列島で植民活動を行い、小王国を築いた。それが、富士古文献に記された富士王朝や、丹後王朝、出雲王朝などと考えられる。その他、北九州、日向、吉備、四国、大和などの小王国も形成され、連合国としての倭国が形成されたのであろう。その指導者層は古代イスラエル支配勢力である秦氏であり、農耕・金属技術による弥生文化の深化が、彼らによってなされたものと考えられる。

彼らは、信仰的には、古来縄文人が持っていた磐座信仰を習合して、巨石や聖石信仰をベースにした古神道（ヤーヴェ信仰、一神教的多神教）に発展させたものと考ええる。そして、稲荷神社を建て、ご神体を磐座や聖石とし、更には、鏡や剣を

神体とするに至ったのであろう。

また、徐福一行は不老不死の仙道を求め、陰陽石（聖石）を設置し祀る傾向があったようだ。中国連雲港市に徐福村が発見され、2005年に筆者もその地を訪問したが、記念館の庭に陽石（ファロスストーン）を発見して、大いに感激したものだ。



写真7 連雲港市徐福村展示の陽石

「富士古文献」には、徐福一行はその出身国の呼称をとって、秦氏を名乗ったことが記されている。後に中国名を嫌って、福岡、福田、福井など福のつく名に変えたり、波多や羽田、畑など、別字の名称に変えたと

いうが、筆者は、基本は、古代イスラエル（ユダヤ）の呼称、「イエフダー」がハダ、ハタに変化し、漢字を当てはめたものと考えている。

興味深いことには、神奈川県の大江山麓の伊勢原には、「竹内文書」に記された古代イスラエル人ヨセフの墓と呼ばれる古塚（真磐塚または心敬塚）や、秦氏の大王とも言われる応神天皇の大臣であった、武内宿禰の伯母に由来すると伝える「伯母様」という地名が存在する。

近くの伊勢原日向地区には、秦氏に係る白髭神社と日向薬師が存在する。日向山の東側には「亀石」という巨石が存在し、その上に巨石群が存在する。中腹には東へ向いた巨大な鏡石や環状列石がある。

日向山の真南にある三宮比々多神社には、周辺の高速度道路建設現場から移設されたストーンサークルが境内に存在している。この神社は神武6年創建という古社であり、真磐塚のほぼ真南に位置することか

ら本来は塚を祀るために造られた社である可能性が高い。（超歴史研究會著「ヨセフの墓日本で発見」月刊ムー2006年6月号、p128-133、学習研究社発行；皆神隆「神奈川の巨石信仰」、イワクラ会報6号）

大江山頂の真南に位置する秦野は、秦川勝の開拓による土地であるとの由来が記された石碑を蓑毛大日堂の境内に有しており、秦野市の旧乳牛「伽羅子神社」は、「からこ神」という中国系渡来人をご祭神としていたが、徐福一行が反映されているものと思われる。

写真8 神奈川県秦野市の秦川勝が記載された石碑



「伊弉諾子社」を「伊弉比」を中心とし

て、真西に富士山山頂があり、真東に相模一宮・寒川神社が位置する。

真北にヤビツ峠があり、南に五所神社が配置していることから、「伽羅子神社」が中心となった方位線が形成される(向井毬夫、石川邦夫共著「古代相模の方位線」(昭和59年10月、野麦書房発行)。秦氏が各地で都を作るときに、聖地に対する方位を重視したことがここでも表現されているようである。

仏教が盛んになる奈良時代になつて、大山を開き大山寺を創設したのは良弁僧正である。彼は大山中腹に49の草堂を建て、弥勒の兜率天を再現しようとしたと言われるが、もともと東大寺の初代僧正となつた高僧であり、東大寺要録などの記載事項から、秦野漆窪の出身と論証されている(秦野市史研究2号、1982, p15-29、松本信道、漆部直伊波と染屋時忠、秦野

市史研究3号1983, p30-45)。

ただ、前半生が不明で伝説的なことが多く、秦氏系の近江商人が出た近江地方にも関係を持ち、「ヤホエ(ヤーベ)神事」など、ユダヤ的儀式の残る京都府相楽郡の笠置山で修業していることから、秦氏系渡来人である可能性が高い。

東大寺二月堂の構造は、メッカの拝火神殿(カアバ)に似ているとい、二月堂では観音像が本尊になっているが、カアバでは、マリア像やイエス像があるという。ゾロアスター教のアフラ・マズダの教えと火と水への信仰が、ユダヤ教、景教にも影響を与え、東大寺の儀式にも取り入れられたのであろう。その東大寺の第一人者・良弁僧正が秦氏であり、大山を開いたことは、大山周辺に古代イスラエルの事跡が多く残されていたことが配慮された可能性も考えられる。

最後に、相模大山阿夫利神社は、ご祭神が大山祇命であるが、そのご正体は秦氏の祖である「徐福」である可能性が高いことを記録しておく。大山阿夫利神社は、関東総鎮護の本山として崇敬を集め、江戸時代に大山講を通じて大いに賑わつた。その基点になつたのが伊勢原町であるが、「伊勢原町勢誌」p132には、次のような記載があつた。

「大山の山岳信仰に関連して、山梨県の道志村に残る伝説で、秦の徐福が蓬萊山なる富士に不老不死の仙薬があると聞き及び、五百人の男童童女を使わして求めたけれども得ること難く、たとえ幾年ついやそつともこの秘薬を手に入れぬ内は、帰国を許さずと厳命した。やむなく五百人の使者は土着して、相州大山までの連山を訪ね探して秦野に移住し、御正体山・地藏ヶ岳・薬師ヶ岳・丹沢山から大山を、神仏に祈り探して、この地を蓬萊山と呼ん

だ。しかしめざす仙薬は遂に見当たらず、五百人の男女はここに帰化してしまつた。」

つまり、徐福一行は、リーダー徐福の厳命で、不老長寿の仙薬を求めて、秦野に移住し、蓬萊山と呼んで帰化してしまつたというのだ。その祖神「徐福」は、大山の奥社に祭られているはずで、阿夫利神社のご祭神「大山祇命」は、徐福を反映しているものと思われる。一方奥社「石尊社」のご神体は、立石状に突出した自然石と考えられており、秦氏が聖石を尊び、祖神の寄り代としたのであろう。

まとめ

イワクラの意義や起源に関して、諸説がある中で、本論は秦氏の視点からみた「イワクラ学」構築の資となるよう心がけた。
秦氏は、嘗て朝鮮半島の伽耶から

日本列島に渡来した人々であるとの意見が強かったが、その実はシルクロードの西の拠点「古代イスラエル」から、東の拠点「ヤマト」に移動してきた人々と考えられる。彼らは、海と陸のシルクロードを往来し、シヌメルからインド、インドシナ、中国などの海洋民族の文化をもたらすとともに、陸路の中央アジア、チベット、

中国内陸、朝鮮半島の文化を携えて、日本列島に定着した。しかも、古代イスラエルに置けるヤーヴェを奉ずる一神教の他、バール神やギリシヤ神話を含む多神教も含めて持ち込むとともに、旧モンゴロイド系縄文人の自然崇拜の思想と習合した。そして、古代イスラエルのピラミッド、巨石、聖石崇拜が、古神道となつて、日本の宗教を形成していったと思われる。

秦氏の素性は、第1波は古代シヌメル人として列島に定着した人々であろう。彼らは、縄文文化をより洗練したものに變化させたのであろう。第2波は、中国經由の徐福一行の形をとつて、弥生時代の文化を洗練し、深化させたと考えられる。第3波は、応神天皇の時代に、秦始皇帝の後裔「弓月君」をリーダーとする中国から朝鮮半島に住みつき暫くして、日本列島に移住した127氏族を含む、秦氏がその実体であろう。

いずれも、シヌメルのジツクラフトウやエジプトのピラミッド、中央アジアの高山や巨石を信仰する人達の子孫であり、日本のイワクラ信仰と習合したと思われる。これらの証拠は、日本各地の山頂の巨石遺跡に残されている。その後、稲荷神社を始めとする日本特有の神社のご神体となるピラミッド型の山や巨石、聖石などになつていったのであろう。

最後に、ピラミッド型の山頂や、巨石や聖石は、特殊能力を持つ人にとつて、宇宙との情報交信のツールとなることが考えられ、秦氏には

それらの能力を持つ人が多い可能性がある。今後のイワクラ学構築の重要な研究課題となるものと考えられる。

了